広報ふなばし写真版
MARCH 3月
vol 18
隔月年6回発行

PHOTO ふなばし

船橋海岸（昭和27年９月）国道14号線船橋橋際より現在のららぽーと方面を望む（寺田俊一氏撮影）

特集
船橋市制50周年記念

なつかしの街角 船橋この50年

高根台団地完成
（昭和36年）

新京成電車と子供達（昭和36年）。白菜の収穫も終り広々とした畑に立つ子供達を写す。ちょうど新京成の電車が通ってくれた。子供達の後方が現在の北習志野駅あたり。（田村良雄氏提供）

船橋市制50周年記念

特集 なつかしの街角 船橋 この50年

市制施行（昭和12年）当時の船橋駅。船橋の鉄道は当時から生活の足として貴重な役割りをはたしていた。

昭和12年頃の京成船橋駅

昭和12年市制施行記念行事の一つとして仮装行列が行われた。写真は大神宮境内での記念撮影。（滝口喜三郎氏提供）

船橋市誕生を報じる当時の新聞

千葉県東葛飾郡船橋町、葛飾町、八栄村、法典村、塚田村の2町3村が合併し、県下4番目の市として船橋市が誕生（人口約4万3千人）したのは昭和12年4月1日のことでした。

当時、旧船橋町は鉄道網の発達などで人口の増加が進み、その数も2万人を超えるようになっていました。そして、やはり鉄道駅（下総中山・京成中山・海神）のある葛飾町（昭和6年町制）も人口が増加し始めていました。そのため、住民の一部は船橋市の誕生を望み、それは県の方針とも一致しました。小規模町村では、道路、公共施設などの整備が不十分であるためです。そこで近隣町村と協議の結果2町3村が合併、船橋市が生まれたのです。

船橋市が誕生してまもなく、日中戦争が起こり、秋には県下一斉に防空演習が行われるなど戦時色が次第に強くなっていきました。そして昭和16年12月8日にはついに太平洋戦争に突入。船橋市内には開戦の前後、軍需関係の工場が進出し、中には戦闘機を生産する工場もでき、それらの工場の進出や東京からの疎開者により、市の人口は

昭和12年頃の船橋本町通り

昭和12～3年頃の中山競馬場

昭和15年頃の船橋本町通り。次第に戦時色が強くなっていった頃。

昭和14年開通の新国道にかかった船橋橋（現在の国道14号線船橋橋）

昭和16年の中山十字路

脱穀作業（昭和12年）出征して働き手の足りない留守家族の仕事を近所の人達が互いに手伝った。（宍倉貞治氏提供）現在の花輪付近。

急増し、昭和17年には6万494人に達しました。19年末以降、東京は大規模な空襲を受けるようになりましたが、船橋市は被害が軽かったため、人口の増加現象は続きました。

終戦後まもなく、軍用地であった習志野原の開拓が始まりました。旧軍人と一般応募者により開拓が進められましたが、21年4月に開拓地の一部が、進駐軍に射撃場として接収されたりして、困難な事業となりました。

一方、船橋市街は戦災をまぬがれ、農漁業地区からの物資の集積地として食糧難時代の買い出しのメッカとなり、"日本の上海"と呼ばれる闇市で賑わいました。

昭和21年11月3日に公布された日本国憲法は、地方公共団体の長・議員は住民が直接選挙するとし、それに基づき22年4月に初の市長選挙が行われ、また同月には地方自治法も公布されました。

昭和22年には学校教育法が公布され、義務教育が6年から9年になり、新制

カヤや雑草が茂るジャングルのような原野を次々と開墾。昭和28年の北習志野駅付近。（田村良雄氏提供）

昭和13年中山―船橋国鉄総武線）電車

間を走る省線（現在の

市制20周年記念巡回演芸のポスター

昭和32年4月市制20周年記念事業として市内を演芸隊が巡回した。娯楽が少なかった当時でもあったが各会場は多数の見物人でにぎわったという。

昭和32年4月市制20周年記念式典が中央公民館（現在の市民文化ホールの前身）で盛大に開催された。

昭和31年国鉄船橋駅上空から駅前通りを望む。車の姿はほとんど見られず、現在の交通ラッシュからは想像もつかない。この年10月人口約11万7千人。

"住みよい社会をつくろう"を合言葉に展開された「新生活運動」では様々な生活習慣が改められた。（昭和32年都疎浜）

農繁期には託児所が設けられ、市の職員が子供達の世話をした。（昭和32年馬込町）

祭礼は昔も今も多くの人々でにぎわう。（昭和30年7月本町通り）

"ミスパール"歯の健康美人コンテストなども市民の間に人気があった。（昭和31年）

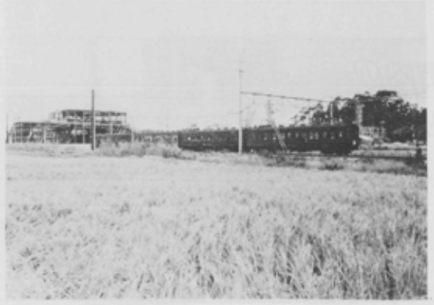
滝不動の桜まつり（昭和30年4月）御滝公園（滝不動）は桜の名所として市内では最もポピュラーなところだった。それにしてもすごいにぎわいである。

昭和30年2月現在の国道14号線船橋橋のあたりから船橋港方面を望む。左側奥ではヘルスセンターの建設工事が進められている。

昭和30年滝台市営住宅。この頃は一戸建ての市営住宅が作られていた。

昭和34年市役所（旧庁舎）が現在の場所に移転して新築された。

昭和33年の国鉄船橋駅。この頃は長距離バスがさかんに運行された。（写真は「京成千葉駅」行きの京成バス）


昭和33年11月10日には西船橋駅が開業（左奥）当時はご覧のとおりだが現在ではマンション、結婚式場などが建ち並ぶ。

中学校が発足しました。また農地改革による小作地の買収が始まり、農村民主化の運動が広まっていきました。

昭和27年頃、町村合併法制定（28年9月）に先がけて、全国的に小規模町村合併の機運が高まり、船橋市に隣接する二宮町（昭和3年町制）が28年8月1日、船橋市に合併。続いて29年4月1日豊富村が合併しました。この両地区の合併により、市域面積が倍増しました。

昭和27年、京葉臨海地域が国土総合開発計画法の特定地に指定され、京葉工業地帯造成の歩みが始まりました。

船橋市でもその動きに呼応し、埋立てによる工場用地造成を計画し、31年から36年にかけて、50万坪の埋立てが行われました。完成した埋立て地には、東京や船橋市街から工場が移転し、工業団地を形成していきました。

また、30年代には内陸部の習志野や藤原にも工業団地ができていきました。

戦後の鉄道網の発達は、新京成電鉄が誕生したことに始まります。同社は22年に新津田沼～薬園台に開通し、24年に鎌ヶ谷大仏、30年に松戸まで延長されました。そして沿線には前原（35年）、高根台（36年）、習志野台（42年）の団地が相次いで造成されました。

40年代以降には夏見台（43年）、若松（44年）、金杉台（46年）、行田（51年）、芝山（52年）の団地が次々と造成され、また民間企業による宅地造成も急ピッチで行われました。そのため昭和39年に20万であった人口は、44年に30万、49年に40万、58年にはついに50万人に達したのでした。

現在船橋市は市内に9本もの鉄道が走るなど非常に交通網が発達しています。また産業の発展に大きな役割をはたす京葉港を含わせもつなど地理的優位性に恵まれ、京葉地域の中心的都市として発展を続けています。

しかし一方で、このような急激な人口増加によって生じた道路、治水など都市整備の問題が山積しています。大橋和夫市長は就任以来、これらの都市問題を早急に解決し、「活力ある近代的都市・船橋」をつくりあげるため新しい基本計画に添った、市民とともに明るく健康な活力のある街づくりを進めています。

昭和31～36には50万坪もの埋立てが行われた。（日の出町）

松の緑が美しい境内

まちなかの文化財

⑰ 茂侶（もろ）神社
（東船橋）

東京湾に南面して、長い参道、松の緑の美しい高台に建つ茂侶（もろ）神社。延喜式（えんぎしき）内社というから、船橋大神宮さんと同じぐらい古い。そこに祭られている神様がまた、日本一の美女、コノハナサクヤヒメ（名前からしてすばらしい！）というではないか。もう、何度でもお詣りにきて、一度でいいからチラッとお顔を、なんて俗な思いがむらむら湧く。

このあいだ、どこのテレビだったか、ロッテの有藤新監督夫人がこの神社で〝ロッテ優勝祈願〟のお百度まいりしている姿を映し出していた。同監督の一家はこの神社近くに家を新築されて、今はすっかり〝船橋人〟。そんな話をきいただけでもう、感激屋の船橋っ子は、ロッテ頼むぞ！と思わず身を乗り出してしまう。境内の町会集会所から何やら人声が。耳を澄ますと三波春夫さんの声！あれ？大船橋音頭ではないか。中からおはあさん連六、七人が顔を出してくれる。ジャケットの振り付けをみながら、みんなで自主トレというか猛練習中だという。元気がいい。庚申塔や出羽三山碑に午後の陽が白く光る。

茂呂神社の拝殿

昭和42年習志野台団地が完成。手前のあき地が習志野台中学校の敷地。この年10月には人口が約26万人となった。後方に高根台団地が見える。

昭和41年4月11日新京成北習志野駅が開業した。

昭和16年〝ニイタカヤマノボレ〟の暗号が発信された行田の無線塔。昭和46年に解体され跡地には行田団地が建設された。

昭和45年3月まで総武線にもSLが走っていた。新海老川橋上から。（山川正作氏撮影）

昭和58年ついに50万都市となる。新しい第二の発展期を迎え、船橋の街は今急テンポで生まれ変わっている。

昭和44年3月29日営団地下鉄東西線が開通。東京がグンと近くなった。

船橋サーキット（現在のオートレース場付近）は多くの若者でにぎわった。（昭和40年）

昭和35年には船橋市に初めての日本住宅公団前原団地が完成。10月1日には第一次の入居が開始された。

昭和36年には高根台団地が前原団地に次いで完成した。

39年5月ヘルスセンター大劇場で東京五輪音頭を歌う三波春夫さん。（山川正作氏撮影）

38年11月2日、現在のセンター競馬場駅付近で東京オリンピックの聖火リレーを迎える人々。

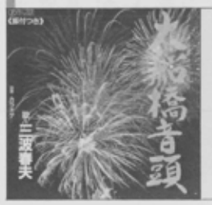
海苔の天日干し。海老川ぞいで昭和30年代の後半までよく見られた光景である。（浜村元治氏撮影）

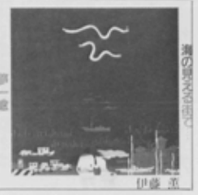
市制50周年記念写真展「なつかしの街かど」●会期4月30日（木）まで●会場市役所1階美術コーナー

市制50周年記念愛唱歌

大船橋音頭
作詞・歌　三波春夫
作曲　遠藤　実
（B面　カラオケ）¥500円

海のみえる街で…
作詩・作曲　伊藤　薫
歌　伊藤　薫
（B面　夢一途）¥500





市内各レコード店、社会福祉協議会で発売中

毎月26日　市内の銭湯は「香り湯」です

「香り湯」は昔からある「ユズ湯」や「しょうぶ湯」だけでなく、レモンやカリン、実母散などを湯に浮かべて皆さんに楽しんでもらおうというものです。毎日忙しく働いているお父さん、お母さんも是非お近くの銭湯に一度足を運んでみませんか。

さる３月14日(土)、消防局５階大講堂で、船橋市スポーツ健康大学の修了式が行われました。このスポーツ健康大学は、スポーツ健康都市の一環事業として地域のスポーツ指導者を育成するため、昨年４月に開校した日本ではじめてのもの。この日、一年間のハードなカリキュラムを終え、めでたく卒業した第１期生54名一人ひとりに、大学長の大橋和夫市長から記念の楯が贈られました。

スポーツで健康ふなばし
こんにちは…

市役所付近の山谷澪には最近までベカ舟が並んでいたが、現在では埋立てられ、新工法によって固められている。

編集だより

なつかしい船橋の写真いかがでしたでしょうか。今年は市制50周年として、いろいろな催しや行事が予定されていますが、こうした時にストレートに威力を発揮する映像はやはり強いものだなあと感じます。読者の皆様に全てをお見せできないのが残念ですが、４月30日まで市役所美術コーナーで「市制50周年記念写真展」を開催いたしますので是非お出かけください。ところで今回は寺田俊一氏、田村良雄氏、山川正作氏、宍倉貞治氏、滝口喜三郎氏、浜村元治氏の６名の方々に貴重な素晴しい写真をお借りすることができました。紙面をおかりして厚くお礼申しあげます。

PHOTOふなばし　第18号　　発行　船橋市　昭和62年３月　　船橋市広報公聴課　　印刷　㈱総合印刷新報社